

すんごく
寸刻。
④4814'11

ふくねすみ
袋の鼠 1932。
の中の鼠 4883。 滋賀 569 4,822

5万分の1地図

出立云1067 宮地 地號 1529

⑥4902 ⑥4918 125

大山紀下388⁹朱45行
125

西へ西方に敵の追手の軍勢が迫つてきては
いまいかく
人々は一きりに、西の二角を凝視した。
今、敵の軍卒たちに急襲されたら、阿蘇公
の奥の大海上皇子らは、鼠の鼠も同然、
入る所かなゝのである。の中
一刻も早く、最後の大きな難関と曰ひえ
るこの峻険な断崖絶壁を越えなければならぬ
かつた。

纪 F388[°] ⑤ 4816⁸ 1099
沙土 墓路 395^P
每 186

一四

前段 1899-1901 4,823

氣也 木子元687^P 木子元87^P 山枝 934^P 彼方 438^P
木子元87^P 木子元87^P 級下390 二暮 132^P 山口 ④ 2294^P
木子元87^P 木子元87^P 木子元87^P 聰鳥 云545^P

あそだに
阿蘇谷 64818⁷ 1159

4.824

记下388
注29

④ 2295^P 几±12 55[?], ④ 2295^P 山

和名 640⁸ 日田
628 生葉
産深

越二十三年

米

相當する

全
X

セイタガラム
前年 1271P
接合部 2264

4,825

疾駆989^D 疾1624^D 疾F388^D
卒兵云586^D 一金云123^D 4814^D 疾F386^D 汇17
拒毛云824^D 宦司云491^D 毛4810^D 未28

それには、前日六月二十四日の
早晩に、留守司(・留守を預かる官司)高坂王が駅
鈴の引き渡しを拒んだ時から以降の大海上白王
子方の動きには、目を見張るものがある。
大分君(おほきだのきみ)は、馬に鞭打ち、馬を乗り迷走
たびたび一途(いぢゆ)に駆けて近江(おうみ)へ到り、
高市皇子(たかいちのみこ)は、父(おとう)舉兵(しふう)の報を聞
くや、ただちに配下の九名(くわいめい)を引きつれて疾駆(しふく)
山口(さんぐち)で父大海人皇子(おほひめひとのみこ)と落ちあつたよう
解(かい)さぬる。登(のり)り口(くち)
下(しも)て六月二十五日の朝(あさ)には阿蘇谷(あそだに)の東端(とうばん)
大分君(おほきだのきみ)は、父大海人皇子(おほひめひとのみこ)と落ちあつたよう
時(とき)を越えて、開(あ)け入(い)り、杖立川(じょうだいくわ)へ南(みなみ)に
奥(おく)へと本(もと)、近江(おうみ)へ大宰府(だざいふ)の方(ほう)は、
天下を擧(たげ)かす戦(せん)いの前兆(ぜんちよ)に、まだ、全く
気付(おぼ)けていたなようだ。

4.8.26^P

ヒガカク ととかく

「こうて」④ 4.8.23^{未行}
「とつかれ」⑤ 4.8.20^{6行}

HV 改行

一行

大海人皇子舞一^{おほ}は、
阿蘇^{あそ}外輪山の内壁を、右に折れ、左に折れ、
峻^{かが}達^たへ^は、
さき^さ背^せ負^おも^り、
な山崖を一步一歩^{ひづか}登^{のぼ}り、互^{たが}に勵^{はげ}まし合^あいながら、
突^{とつ}破^ぱした^たのだ^た。
すなかち、ヒガカク無事に、最初の難関を

米

H5.10.17(四) 錄上325¹ 天向持和上260¹ 主猶大沙法烏拉
几上記563¹ 五十度 ~ 325^P 王都④4828^P 河下588^P 徒化④-46^P 十上(F) 292^P 河下388^P
耶書④ 4340^P - 1/2129^(E) 4827^P 河下388^P 安息谷下 231^P 4803^P 一經上 280^P 35^E 在五度半 田道向守

東国への入口の守り

(中) 588¹ p
主教紀下統記(4)-46

18

4.828^p

あなどくのくのくとち
いなし 金4375 穴戸国司の草壁庫に3
稻主 金4340 1/2 稲下386 4行↑
12升 ✓

乙35
國司田 4809 D 田 4806 P 1067
1升 1升 386 1升 ~

3
11
8

あさひは、六月二十二日に吉野を後にいた
むらぐらのむらじきり
郡の兵士を微発した
くわうはつ
村国連男依らは、
むらぐらのむらじきり
湯沐令多臣品治に機密を打ちあけ、ますやの
ゆめのうながーおほのゆめきみ
くわうはつ
山口県へ急行し、
やまぐちけん
奴國へ山口県へ急行し、
やくくにやまぐちけん
機密を打ちあけ、ますやの
きみをう
た
た
うか。

さら一に更に、男依らは、國司等、
の引山を領有する伊都國の國守三空連石床

そこで、國同守三宅連石床は主船高田首新
家・三輪君子首・湯沐令田中臣足三麻呂らとサヌ
ト、救援の為急いで南下。一七キテ、
ヘこの日、六月二十五日に、大海人皇子ら
を迎えた。

と川又と名のであらう、と想察さへる。

1

用906°-3/4系管

① 907°-1/2

外刊④903³1行四

紀上266^年新羅王の子天日捨率帰^{アメノヒコスミヤハ}ヒル
牙^ヒ鹿^カ參^ス照^ウ!

4829^P-1/2

記(三)
153

記(三)
153

纪上280^P

④ 4807
④ 4845

ちなみに述べると、

- ・垂仁紀の最末尾に、「田道間守は、是三宅連の始祖なり」
- ・垂仁記に「天皇（垂仁天皇）、三宅連等が祖、名は多遼摩毛理をもちて、常世の国に遣はれて、とキレくのかぐの木の実を求めしめたまひき云々」
- ・新撰姓氏錄、右京諸蕃・同摂津諸蕃に、「三宅連、新羅國王子天日杵命え後也」とあり、三宅連の同族に橘守・糸井造などがある、といふ。（「日本書紀」（上）日本古典文学大系、岩波書店、二八〇頁、注五参照）
- ・「う。」（「日本書紀」（上）日本古典文学大系、岩波書店、二八〇頁、注五参照）
- ・そこで、「あめのひほこ」といふ血筋を考えてみた。〔第十一章へ香椎五十述手一一三宅連〕
- ・新羅國王子天日杵一一一田道間守一一一」という血筋を考えてみた。〔第十一章へ香椎五十述手一一三宅連〕

一行

たにさくらん1341
大層 基た

未④3242
未6斤

4.829P-3/2

④3242P

つまリ、
 三宅連は、天日梓。田道間守。五十ニ延手
 の直系の子孫であるた

よう見受けられる。

また、すでに述べたようになり
 ていたのであろう

五十ニ延手。よびテの子孫は、伊都国ばか
 リでなく、引山(下関市彦島)をも所領と(

斯等の項にあひて既述)

と思わる。(第六十五章へ阿利斯等。阿羅
 連石床は、^{12.5cm}新羅國王子天日梓の末である國司守三宅
 当する穴門の引山を居所としていたのであ
 うう

と解一帯みた。い。

天の時の大海人皇子の喜びは大きかった。
 何となれば、
 天日梓の末裔である國司守三宅連石床

をはじめとする軍勢があ、大海人皇子等一行を

本文
立川上流域
12年

ようほく
安所
関所
2270^P
1237^P

街下 292^P
発17
大津皇子 4842^P

三輪子 4902^P 2356^P
田中一 4902^P 2356^P

男依 4828^P 2356^P
吉野を後6月22日
紀下 388^P 232

監視され小まこととなつた。
のものいひ兵達によつて、昼夜となく厳重に
外輪山などの要所(関所)が、武器を持ち
うの追手の着廻(おきまわ)を防ぐためであつた。
西行大後(肥後)へ北行近江(大宰府)か
続く山道の守りを固めさせた。
の軍兵で見張はれて、東西にあらはる。北(大宰府)へと
の首新家(しんけい)から南下して来た。國司(こくし)
二輪君(にりんきみ)と、湯沐令(ゆめい)田中匡足(たなかのけいし)
・湯沐令(ゆめい)田中匡足(たなかのけいし)は三百人の軍兵(ぐんび)
と、高田(たかだ)の石床(せきゆう)・足麻呂(あしどり)らから
といふ快挙(かいきよ)を示して、いたからであつた。
こうして近江(おほいた)の大宰府(おほさむら)と、倭京(しづきやう)との間を、とり
あえず分断(ぶだん)し得た。

H29(2017)6.29

H5.10.19(火)

4.831^P

(二)
天つき
改行

やまと
内傳 ④4852 紀下396^P
2行

なお、七日後の七月二日、大海人皇子の指

示
に
よつて、
三輪君子首は、ニの大山(阿蘇の外輪山)
より、ニ小を越えて(大)後(肥後)へ向
か
い
田中臣足麻呂は、倉歴道(阿蘇と大宰府と
きつなぐ道か)で守備する
(二)とくなる。(後述)

米

ばら
暫く 云々^p 紀F388年
波行^{モハシ}

あとう 底
圧倒 45°

4,832

今次 19 手下巻

ヤマハニヤニ
後承紀下406^P末2行
① 4807^P 4814^P 4830^P かほゆ 紀下388^P
川曲 云 482^P 川の折れ曲て流中2行
~~△~~ ~~△~~

紀下389P 地名 1464⁹

寒え雷雨 4833P
大カツワ、小井戸井手

272
248
424
2239
正月続で…現象は止む
6/26の朝には朝晴
東7は向日合む

馬地す 1786⁹
ニセ

リ 休憩する。と も 出来ず 出發した。
 はみな衣服を濡らした。夏とは川元、衣裳の湿
 小 姫 荒野皇女は、馬の背に搖られて雨の夜道
 を急ぎ下りながら、一一向に遙かな昔のと
 て想ひを馳せた。あらゆるにたゞはるにあ
 たかつて、田心姫様は、この山間の道を輿
 ゆきになつたから、姫様は、この山間の道を輿
 己甚い。寒え雷雨に見舞われて、さうに
 寒は塞ぎに凍えきつておられたのに、さうに
 ひ従う者はみな衣服を濡らして、寒さに堪えず
 る)に着いた時、小屋に火を放つて、冷えき
 郡家(豊後国大野郡に三重と云ふ)へ
 つ大者達をあたたまらせたのよ。(第19回
 萩野皇女は、四百年余の昔の出来事と、今
 の己の状況とを、重ね合わせてみて、おれ
 へ三重町へ参照

H9.4.30
H5.1020(1) ^D (每)4842 ^P 宇16合下 232 ^P
美智子皇后倒地被押。纪下 389 ^P 井上下 292 ^P
(延喜式) ^P (日本正史) (每)4842 ^P

4,834^P - 1/2

④ 2303 P

使者を遣ゆ
山部王と石川王とか、帰服する爲にやつて参りまつたので、関へ留めておりまつた。と報告した。
大海上皇子は、路直益人を使わして二人を召しよせになつた。益人は、関の方へと馬近が
ケアハツた。

と見ゆ
强行軍が続いた。
真夜中二う
所蔵外輪山の開拓
枝立川上流域

到着されると、
ようこそ見受けらる。(後述)
とすみば、
ひのひめみこは、
うらぐ、
おおきに、
はなへまく。
馬に乗つ

なかつた。(第三十六章へ寒え雷雨への頃参
照)
・ な お、二の一夜(りちや)が明けですぐ一
リ、六月二十日(あつと)の旦(たつと)は
ハ大海人皇子(あまのみこ)の一行(いっこう)は、早くも、宇佐国(うさくに)

H31(2019)K18(木)～4.19(3回)

12

4,834^P - 2/2

統計は 64842

F4/19
4/18

7 ち尋ねになつた。
7 ケの二人の特徴を由一
二あたリ人アタリをアタリお召アマスのアマス大アマ海アマ人アマ皇アマ子アマはアマ大きアマくアマ領アマきアマ身アマをアマ乗アマり出アマ
益アマス人アマスはアマス関アマシキのアマシキ方アマカニへアマカニと馬アマけアマてアマつた。
益アマス人アマスをアマス使アマスわアマスし

さかんえ
祈願 516P

④ 3362-1/2の表3~25行

櫛
200
表
お9表新(20)-156
白字の表題

④ 3332-3/5表
OK

4,835P

④ 3396P
E 4/7/20

六月二十六日

天照大神への戦勝祈願

は別府湾沿いの道を北上へ。馬城峯と御許山ともいう。
六四七(ト山)を目標とした。
大元山の山頂に鎮座しておりで、第六十五章「鉤明朝」の
大神ト、戦勝を祈願する所である。天照大神の遷御の歴史の項において述べ
たように、壬申紀(元七ニ)当時の天照大神を祭る内宮は、宇佐国の大元
山頂にあり、山頂へと外宮(離宮)は、南伊勢にあつたう。
・天照大神の分身といいうべき八咫鏡を祭る
と解した。(以下、第9表参照)

卷頭の
とある川のほとりに到つた。
やがて大海人皇子の一行為、大元山の麓の
見上げると、山頂へと続く参道から櫛蒼と茂る
木々に見え隠れしており、一上の方は

リム元ニテ うがが云1767
王非 2317 何う神ム日上トニモム
道理にかなへいることとはまゆて。こと

ハガミ^{シテ} 云 1241

4,836^P

知^チ
智^チ
徳^{トク}
安^{アシ}連^リ阿^ア加^カ布^ブ
④4846^P 2099

定かでない。	大海人皇子は、この参道を登つてゆき、頂
理非をお伺いし、	上の天照大神に直接お目にかかるて、ひとの
かなうものならば、勝たせたまえ	かなか今は、テの余裕が無かつた。不破
と祈りたかつた。	心が急せかれた。
照太神を望拝した。	字闇馬闇へと、川の凹凸にて、天
とある。	そこで大海人皇子らは、川の凹凸にて、天
とある。	かなか今は、テの余裕が無かつた。不破
「二十六日の日記さ水てりる」	心が急せかれた。
「二十六日の日記さ水てりる」	字闇馬闇へと、川の凹凸にて、天
一て、天照大神を望拝みたまふ	そこで大海人皇子らは、川の凹凸にて、天
とある。	かなか今は、テの余裕が無かつた。不破
斗智德日記には、	心が急せかれた。
とある。	字闇馬闇へと、川の凹凸にて、天
「廿六日辰時。於朝明郡迹天川上而拝礼」	かなか今は、テの余裕が無かつた。不破
とある。	心が急せかれた。
日本書紀	字闇馬闇へと、川の凹凸にて、天
日本古典文学大系	かなか今は、テの余裕が無かつた。不破

岩波書店、三九〇頁注一参照

日本書紀 (F) 日本古典文学大系、

45.10.21(木) 160000/月
五江 挿画追加
OSC 1/26から本筋

4.837P

奉祀 云々 云々 云々 15°
2015(令和)のあがつきには
おまつりゆすば

御心 2109°
53分の1地図
左・右・宮司

新藻
御元道

あるいは、

へ云月二十六日の辰時(現在の十時頃)、大

天照大神迹(たつのとけ)

寄藻川(よしもがわ)川上(かみ)おいて、大元山(だいもんやま)山頂(さんてう)の鎮座(ちんざ)

おいでになる天照大神(あまてらすおほみかみ)を望(む)拜(まつ)ねた。

と解説すべきなのかも知れないと

ニニヒハ大海人皇子(おほみこ)は、

みたまひ、お導(みちびき)きくださして、我(わ)が軍(ぐん)に勝利(じょうり)

をもたらして、くださいまーたならば、その時(とき)

トは、必ず(さへ)や御礼(ごれい)に参上(さんじょう)し、厚く御奉祀(ごほうそく)させ

とお誓(ちか)いになつたのであろう。

米

奇妙 4843 153
奥井 ふつうとせん

4838P-2/2

と、あるがまきを記すゆけにいかず、
やむなく、レ々異様なこと承知のうえで、
倭國（大和國）の都から見て、東北の
方角にあら北伊勢の朝明郡の川の刃（川上）
で、天照大神の宮を望み、
と置き換えて記述一だものと思われ。

＊

~~137~~ 138
~~4838°~~ - 1/2 1294

4840P-1/2 内容 { 並)3396
~~4840P-1/2~~ 外容

万L-III^P标本房

81-111⁹87

を行ひて又、伊勢神宮から吹きわたつ
て深い感謝の気持ちを述べるべしであらう。
と思ふ。

夫・神風(万巻二一九九)の靈感を助力に對して深く感謝の気持ちを述べるべしであらう。

大海人皇子は、一、日本書紀記ナ小
さとには、天照大神を尊敬しておらぬ
かたのであらうか。

いや、そうではあるまいか。

大海人皇子は、実は、宇佐国大元山山上
の内宮に鎮座してありて、天照大神を
祀る。天照大神を尊敬しておらぬかた
は、あらう。

を望拝して戦勝を祈願され、壬申乱終結直後、大海人皇子が南伊勢の外宮(離宮)に参拝され、納得してキ因縁の外宮に

と考える時、壬申乱終結直後、大海人皇子が南伊勢の外宮(離宮)に参拝され、納得してキ因縁の外宮に

思われる。

追つて述べるようだ。

同時期の七月二十三日終つた
九州地方、及び近畿地方の戦いは、ほほ
元キ大道を引き返し、大元山山頂の天照大

令和元(2019)10.10㈭ ~ 10.12(4回)
令和2(2020)6.14(日) ~ 6.15(4回)

4,840^p - 7/2

④ 4972 1/2 ④ 4968 ~ 4970

H5.10.22(金)⑤ 天照二神力

紀小(195)
神功記から借用

弘916P
三軍全勝の軍

4,841P

かまくら云
停 425P 待す。
鶴ぐ371, はへ3 御座はす弘337P 至上 769P 天照大神紀上238¹

憶八首58¹ 未起の老翁、日を昇げて至り

後紀参照

勝定の二と。敵が強くて戦う我等が勝つは、火に
勝てばかなず恩賞を与えるよし。

ニう言われた。天照大神を擁いて戦う我等が勝つは、火に
ニこの当時、太陽の色は赤て表わされついた。

とある。

朱衣の老翁には、太陽の色を表わす赤い旗は、
が掲げられていた。

意気高らかに戻の声をあげた。

を祈願した後、太陽の色を表わす赤い旗は、
太陽神に御座に参拝して、戦勝

内宮に御座ます至上の

おは

せんじよ

1

セキト云
屋宇 1240^P
木也 66^P
大分郡基盤
紀下 388^P半2行
紀下 388^P半2行
田 4830^P 4.8K2
五角印紀下 388^P半2行
「七ニ三七」 田 4827^P
田 4864^P
④ 4834^P

要標 $\textcircled{4}$ 4838⁰ \oplus 4830⁰ 左負 3 行
- 2/2

名古屋市立大学 425P

4,843^F

の名を駕たのであらう。
・ 実の定、関を守つていた者庫は、山郡王。
石川王を知らなかつた。そいでさらには、大津
皇子や大分君夷尺らの顔を知らなかつた。
ゆこで関を守る兵庫は、山郡王・石川王と
名のる者達を関に留め置きや
方き大海人皇子たお伺いいたのでだ五
ゆゑふ。

紀下 94¹ 13 儀漢天祐五年
紀下 49¹ 16 紀下 365¹
紀下 49¹ 17 27

4,844

前版 3⁹~9行

全員トド

FM

と覺悟をお決めになつたかも知れぬ。
ほどなくやつて来た路直益人は躊躇うことなく大津皇
子らを自由の身として自らは先駆としてこの
朗報を大海人皇子に伝えたのであろう、と推
察される。

日本書紀

17

日本古典文学大系
四参照

H30(2018)11.14(木)～11.15(金)

平成
H 9.5.1
H元 2/14(火)

因水 4847 5斤

セ F 3867 ④ 4811 てはへた

合計 4860
15斤

4,845^P

不破 4807^P

四

参考迄に述べると、大海人皇子は、

高市皇子

六月二十四日

「恵尺は馳せて近江に往き、伊勢に達へ」

と仰せられただつた。
● 察するところ下
● 大津皇子を喚して、伊勢に達へ
● 大津皇子は、近江に往き、伊勢に達へ
● 高市皇子が、近江（大宰府）
● から真直ぐ東北の方の不破（長豊海峡）、ある
● 今は東方の宇佐へ直行するごとを、禁止され
● たのであろう。

と推測される。
● 近江（大宰府）と倭京（大和の都）とを隔て
● 二人がその方向へ駆け向かつてきたのでは、
● 一人カリまちかえれば、追りすかる敵

敵兵達を招き寄せて、計略が滅茶苦茶になりかね
● ないからである。
● 一人が、目立たないよう、
● 南へ下つて来て、人知れず豊國へ入る、そこ
● と最良の策よと思慮されたが、そのうちに解消さ
● う。 ②

小林
間髪を容れず 10/16

(ニ) P ふええ、紙下390^P
塞ぐ 1934^P 自らと zwar
てわざ 紙下386^P

紙下390^P

4846

東海の軍	東山の軍	凸を発す
大元山の麓の川の辺を後刈 大海人皇子	の一行か 郡家(宇佐の郡家か)に着こうと	おほむとせまふとくわへあと
しておら水たとキ	アキタ。ターフ	おほーあまのみニ
國(彌彌奴國) 山口県美濃一帯の地へ先行し	四日前のレ 六月二十二月に美濃の	おほーあまのみニ
不破の道(長豊海峡)を塞ぐことが出来まーた	う報告した。	みねりつた
と正式に御報告した。	アキタ。ターフ	セシニ
大海人皇子は、雄依(男依)の功績をお	う報告した。	すでにあ聞きの通り
子に手に不破に赴き、軍事を監督せよ	アキタ。ターフ	ときどきとお
更に大海人皇子は不破の道(長豊海峡)	アキタ。ターフ	おこ
方の倭國(近畿地方)へと兵を遣りた。	アキタ。ターフ	おこ
すなめち、山背部小田	アキタ。ターフ	おこ
阿加布を遣りた。	アキタ。ターフ	おこ

④4836
169下へ
安斗知徒

「中津」高尾地図 国9

仲間 636¹
紀下 4850¹

紀下386¹ * 6月27日付 4869¹ 2行にある
4847

紀下403¹
↓ (二)

参照 4845¹ 19
4860¹ 19

山陽 4838¹
山陰 4869¹

ゆ一で 口東海 口瀬 戸内海 の軍を発し、ま
山凹(山陽道・山陰道のうち、山陽道を指して)りて
大種桜部臣五百瀬。土師連馬手を管ゆ一で 東
あううの軍を発したのたつた。
 四因みに述べると、これらの中の軍勢は、九
州から見た時には、△東方へ向かた軍▽、つ
まり口東の師△と△うことになる。(天武紀元年
七月四日条の口東の師△参照)
 六月二十四日ト吉野を出て以後の連日連夜
 の強行軍に、さすがの大海上皇子も疲れきつ
 て一まわ小たのであうう。
 ありはこの桑名郡家は、豊國の中津
 あたりに相当すると考えられたの
 あるが、なかつ

→ 45.10.23(±) \oplus

金太子紀
紀下 368 天子的世系

4.848

なあ、
おほ
あまのみこ
ひうのひめみー
12.5cm
あすか
へ大海人皇子の妃菟野皇后は天智上皇の
娘なのだから。豊國の中臣氏に手厚いもて在
りを受けられた。